

## 死への準備教育—特に大学生に対して—

大\* 町 公

## はじめに

個人的なことになるが、最近、死について関心を持つに至った理由を考えてみると、日野原重明氏の『死をどう生きたか』（中公新書）を読んだ時の感動、岸本英夫氏の『死を見つめる心—ガンとたたかった十年間—』（講談社文庫）を読んだ時の衝撃をまず思い起こすが、それらに加え、三年前上智大学で行なわれた「比較思想学会」におけるシンポジウム「東西の死生観」でのアルフォンス・デーケン氏の発表を挙げなくてはならない。

Death Educationなるものが存在すること、教壇から数多くの学生に向かつて死について語るができるということ、それ自体が新鮮な驚きであった。筆者はバスカルの『パンセ』に関して、人間の「悲惨さ」を示す最たるものとしての死を講ずる時も、さっと触れるに止めておくのが常であった。

しかしより大きな理由といえば、両親の年齢ということも確かにあるが、それ以上に自らの年齢ということになるのだろうか。デーケン自身がこう説明してくれている。人は三十五歳—四十五歳くらいまでの間に中期特有の「深刻な精神的危機」を経験する。それは自分の人生の半分がすでに過ぎ去ったことを、ある日突然自覚するといった

体験に由来する。自分の生きられる時間が限られていることの認識である。この新たな時間意識は当人を鬱状態に陥れるきっかけともなるが、時間の貴重さをも発見させてくれる。人生半ばともなると、もはや死というテーマは避けて通ることができない。「中期の危機は、本式かつ体系的な死への準備教育講座を受講する絶好の機会である。」と。

では、Death Educationとは何か。

従来は「死の教育」と直訳されたり、デス・エデュケーションと単にカタカナで置き換えられるだけのことが多かったが、デーケンは「実質的な意味内容に即した訳語」として、「死への準備教育」とするのが適当であろうと述べ、今日では一般にもそう訳されることがふえてきている。以下では筆者もそれに従うことにしよう。

それでは、「死への準備教育」とは何であるか。すでに名前を挙げたが、この領域では日本の第一人者であるアルフォンス・デーケンの考え方、特に氏の編集になるメジカル・フレンド社発行の叢書『死への準備教育』全三巻を中心に見てゆきたい。氏は一九三二年（昭和七年）ドイツ生まれ。神父。フランスの哲学者ガブリエル・マルセルの教えを受ける。現在五十九歳、上智大学教授。大学では人間学、西洋倫理思想史、それに死の哲学を担当。上智大学にて一九八二年より毎

年一般市民向けに「生と死を考えるセミナー」を、また毎月「生と死を考える会」を開催。

### 一、「死への準備教育」

「死への準備教育」とは何であるか。死は誰にでも必ず訪れる。普遍的で、絶対的な現実である。人間は死すべき存在であって、生を享けた瞬間から、死へと向かって歩み続けている。われわれは人生においていつか身近な人の死、自分自身の死に直面せざるをえない。死そのものを前もって体験することはできないが、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得することは可能であるし、また必要でもある。」これが死への準備教育の主な目的である。「死を意識し、おのれの生きる時間が限られていることを自覚する時、人はかけがえのないこの人生の貴重さを改めて認識し、残された時間をより豊かにまた健やかに生きるべく努めるようになる。」<sup>5)</sup>「そういう意味で、死への準備教育は「よりよく生きるための教育」、「ライフ・エデュケーション」に他ならない。このことは学生に対して十分説明する必要がある、とデーケン<sup>6)</sup>は強調している。

人は人生における重要な試験に臨む前には教育、訓練といった形では必ず準備する。入試や就職に際して十分な準備が必要であることはよく承知している。まして死という「人生最大の試験」に対してなら、何も準備をしないのはおかしいのではないか。例えば、末期癌の患者に何の心構えもなく死に向かわせようとするのは、社会の態度としてあまりにも残酷ではないのか。基本的な発想はここにある。

かつて死は決してタブーではなかった。親しい友ですらあった。中世のヨーロッパでは「メント・モリ memento mori」という言葉が座右の銘とされ、人々は「アルス・モリエンディ(死の芸術) ars

moriendi」と題された絵や書物でよき往生の心得を学んだ。日本においても、死の作法を教える武士道や、諸行無常を説く仏教の長い伝統が存在する。天災、飢饉、疫病などを通して、人々は常に生が死と隣り合わせであることを実感してきた。遠藤周作も「日本には死に支度という言葉が昔からあった。デス・エデュケーションとは死に支度と訳してもいいと思う。」<sup>7)</sup>と述べ、別の本でも「死に支度いたせいたせと桜かな」という一茶の句を紹介している。しかし近代医学の発達により、病気による死亡が著しく減少し、それに臨終の場が家庭から病院に移るにつれて、死は次第に人々の意識から締め出されるようになり、ことに今世紀に入って、死はすっかり忌むべきタブーと化してしまつた。

ところが、ここ十五年くらいの間に事態は変わってきたというのである。死に関する諸問題の学際的研究である「サナトロジー(従来は「死学」と訳されていたが、最近「死生学」と訳されることが多い)」が新たな関心を集め、死を体系的に学ぶことの重要性が見直されてきた。アメリカではすでに小学校から大学、社会人講座に至るまでデス・エデュケーションが導入され、ドイツにおいても宗教教育の中で死への準備教育が行なわれている。わが日本においても徐々にではあるが変化が見られ、最近では死を取り扱った書物が書店で一つのコーナーを形成し、ベスト・セラーとなることさえある。

デーケンは曾野綾子との往復書簡の中でこう回顧している。

「私の知る限り、当時我が国(一九七六年頃、日本―筆者註)には、死の問題を正面切って取り上げる講座は存在しませんでした。それで私はこの未開拓の分野にチャレンジしてみようと考えたのです。一九七七年に初めて『死の哲学』を開講した時、同僚や知人達の多くは、日本では死がタブー視されているから学生が集まらないだろうと忠告してくれました。しかしいざ蓋を開けてみる

と、私に他に担当していただくの課目よりも多い二五〇名余りの学生が登録してくれたのです。当初、一般教育の半年間のコースとしてスタートした『死の哲学』は、一九七八年、七九年と続いて八〇年からは通年課目となり、やがて毎年六〇〇名もの学生を集めるようになりました。<sup>1)</sup>

さて、「死への準備教育」に戻るが、デーケンをこれを通例四つの観点から考察している。すなわち、(1)死への準備教育における四つのレベル、(2)死への準備教育の十五の目標、(3)死への準備教育の方法、(4)死への準備教育の課程内容である。では、まずそれに従って見てゆくことにしよう。

## 二、死への準備教育における四つのレベル

死への準備教育は次の四つのレベルで行なわれる。すなわち、①知識のレベル、②価値観のレベル、③感情のレベル、④技術のレベルである。

- ①知識のレベルでは、専門知識の伝達が行なわれる。受講者はサナトロジーの研究成果に親しみ、知識のレベルでそれらを身につける。
- ②価値のレベルでは、各人が自己の価値観の徹底的な見直しと再評価を行なう。死に関する問題は、単なる知識だけでは解決がつかない場合が多い。臨死患者の延命、安楽死の是非など態度決定、決断を迫られることがしばしばあり、価値の解明と堅固な価値観の確立が目標とされる。
- ③感情のレベルでは、死が引き起こす様々な感情の問題との対決が行なわれる。特に、極端な死の恐怖を緩和することは、臨死患者とのコミュニケーションを円滑にするためにも重要である。

④技術のレベルでは、死にゆく患者との具体的ななかかわりに必要な技術の習得が行なわれる。この場合、①、②、③のレベルを前もって

クリアーしている必要がある。

## 三、死への準備教育の十五の目標

①死へのプロセス、ならびに死にゆく患者の抱える多様な問題とニーズについての理解を促す。

②生涯を通じて自分自身の死を準備し、自分だけのかげがえのない死を全うできるように、死についてのより深い思索を促す。

③悲嘆教育(グリーフ・エデュケーション)、つまり身近な人の死に続いて体験される悲嘆のプロセスとその難しさ、落し穴、そして立ち直りに到るまでの十二段階について理解することを目指す。

④極端な死への恐怖を和らげ、無用の心理的負担を取り除く。

⑤死にまつわるタブーを取り除き、それによって、死という重要な問題について自由に考え、また話すことができるようになり、死に結びついた情緒的問題の解決も可能となる。

⑥自殺を考えている人の心理について理解を深めること、また、いかにして自殺を予防するかを教える。

⑦告知と末期癌患者の知る権利についての認識を徹底させる。

⑧死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題への認識を促す。(例、植物人間、人工的な延命、消極的・積極的な安楽死など)。

⑨医学と法律に関わる諸問題についての理解を深める。(例、死の定義と死の判定、脳死、臓器移植、医学研究のための献体、腎臓の遺贈、アイ・バンク、遺言の作成、死後の家族援助など)。

⑩葬儀の役割について理解を深め、自身の葬儀の方法を選択して準備するための助けとする。

⑪時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激し、価値観の見直しと再評価を促す。

⑫死の芸術(アルス・モリエンディ)を積極的に習得させ、第三の

人生(老年)を豊かなものとする。

⑬個人的な死の哲学の探究。文化的・教育的背景によって制約された死に関する社会的・心理的・イデオロギー的固定観念から人間を解放し、各人が死について自分なりの個性的な理解を自由に選び取るこ  
とができるよう積極的に援助する。

⑭宗教における死のさまざまな解釈を探る。その際、生きがいと死に  
がいの相互関係についても考察する。

⑮死後の生命の可能性について積極的に考察するよう促す。その際、  
根源的希望が現在の生活に占める重要な役割を理解する。

以上がデーケンが挙げる「死への準備教育」の十五の目標であるが、  
その一々についてコメントすることは筆者の能力を超えていよう。

死への準備教育はすでに見たように「自覚をもって自己と他者の死に  
備えての心構えを習得する」(傍点筆者)ものである。大学生に対して  
ならば主として「他者の死」に関するものとなるであろうが、①  
||ロス女史の『死ぬ瞬間On death and dying』には、「死へのプロ  
セスの五段階」なる考え方が見られる。すなわち、「否認denial」、  
「怒りanger」、「取り引きbargaining」、「抑鬱depression」、  
「受容acceptance」であり、デーケン氏はこの後に第六の段階とし  
て「期待と希望expectation and hope」を付け加えている。

③の「悲嘆教育」については、デーケンはロス女史の「五段階」を  
ヒントに、「悲嘆のプロセスの十二段階」という彼自身の理論を切り  
開き、身近な人の死より受ける悲嘆からいかにして立直るかを教えて  
いる。

また、主として「自己の死」に関して、⑮におけるガブリエル・  
マルセルの「日常的希望」と「根源的希望」の区別等、興味深いもの  
は他にも多くあるが、拙論で取り上げたいのは②、⑤、⑬とも関連す

るが、特に⑩である。筆者の専攻にも近い領域であり、また大学生に  
とって最も大事な事柄の一つであると考えられるからである。その説  
明として、デーケンはこう続けている。

「多くの人は、あたかも時間がまだいくらでも自由に使えるかの  
ように、日々をただ漫然と過ぎ去るにまかせており、それゆえ充  
実した生を送ることなく、散漫に生き、貴重な時間を無為に費や  
している。死への準備教育は、生きる時間が限られているという  
事実、自由になる時間が無限にあるわけではないという現実に入  
間の目を向けさせようとする。自己の有限性を認識させられるの  
は、けっして愉快な体験ではないが、そこには積極的な意義も存  
在する。自分の時間が限られていると悟ることにより、私たちは  
時間の貴さを発見し、それによって残された時間をより有意義に  
過ごすことができるようになる。」<sup>20)</sup>

「死を直視し、より密度の高い生き方をすると、多くの場合、  
自己の創造的能力を開発することでもある。……人間は誰でも持  
てる潜在的才能のなにかを眠れるままに放置している。時間  
が限られているという意識は、しばしば潜在的な能力の可能性を今  
すぐにも実現するための具体的な動機となる。」<sup>21)</sup>

若い人はまるで時間が無限であるかのように、生を浪費している。  
死への準備教育は生が限られていることを自覚させようとする。人間  
としての自らの有限性の自覚、つまり死の自覚こそが、その人の持つ  
ている潜在的な創造的能力を発揮させ、充実した生を送らせてくれる。  
川端康成も「あらゆる芸術の極意は、この『末期の眼』であらう。」と  
言ったことはよく知られているが、筆者自身この点をもう少し敷衍し  
てみよう。

セネカも『人生の短さについて』の中で、一般には「生は短く術は  
長し」(ヒッポクラテス)と言われているが、「われわれは短い時間

をもっているのではなく、実はその多くを浪費しているのである。人生は十分に長く、その全体が有効に費されるならば、最も偉大なことをも完成できるほど豊富に与えられている。……人生は使い方を「知れば長い」と言う。そして「人生の使い方」のキー・ポイントこそ死であり、自らの「有限性」、「可死性」の自覚に他ならないことを指摘するのである。

二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）は自伝的小説『平凡』（明治四十一年刊）の冒頭、主人公「わたし」にこう言わせている。

「わたしは今年三十九になる。人世五十が通り相場なら、まだ今日明日穴へはいろいろとも思わぬが、しかし未来は長いようでも短いものだ。過ぎ去ってしまったえば突にあっけない。まだまだといっているうちにいつしかこの世の隙が明いて、もうおさらばという時節が来る。その時になって幾らあがいたってものがいたって追いつかない。覚悟をするなら今のうちだ。

いや、しかしわたしも老い込んだ。三十九には老い込みようがチト早過ぎるという人もあろうが、気の持ち方は年よりも老けた方がよい。それだと無難だ。」（傍点筆者）

主人公のように四十近くになって、残り「あと十年」と考え、言わば「死に支度」を開始すると、われわれのように「人生半ば」と考え、そろそろライフ・ワークをと重い腰を上げるとでは、あるいは二十代で「人生半ば」と考えるのと、今の学生のように「青春真只中」と考えるのとでも、その生き方は根底から異なるであろう。現に二葉亭は朝日新聞社特派員として渡ったロシア、ペテルスブルグにて肺を患い、その帰途、インド洋上で四十五年の生涯を閉じたことを思えば、このような主人公の「覚悟」も決して早すぎはしなかったということになる。

同様のテーマで、中野重治は昭和四十年、六十三歳の時行なった講

演「漱石について」の中で、有名な書齋での写真に触れて、この五十年前、自分の歳より一回り以上も若い夏目漱石（一八六七—一九一六）の顔を「苦虫を噛み潰したような顔」と評したあと、これはまさに「老人の顔」、「じいさん」いや「じじいの顔」と表現している。写真の印象もそうだが、書いたものを読んでも、漱石と比べると六十三歳の自分は「青洩垂らした小僧」であり、五十前の漱石はすでに「大人」であることを「認めないわけにはゆかない」、そのことは「いくら地団駄踏んでもごまかしようがない。」と述べている。漱石もまたまさしく「人世五十」の時代を誠実に生き切った人であつたろう。

中野はさらに今日の平均寿命の著しい伸長に触れて、漱石を読むことはわれわれにそのことの是非について問題を突き付けていると言う。われわれの寿命は「ただ伸びた」だけではないか、「ゴムをズーッと引つ張ったように伸びた」だけなのではないのか。寿命が伸びたことによつて、われわれは「本当にいろいろ苦勞し、勉強して、だんだんに人間として高まつてきたのか、深まつてきたのか、力量が大きくなつてきたのか」と、プラトンの「大切にしなければならぬのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということなのだ。」という言葉を思い起こさせるような、倫理的に極めて重大な問いを提出している。

叢書『死を考える』の中の「アメリカにおけるデス・エデュケーション」（若林一美）によれば、アメリカの「死への準備教育」は「高齢化と医療技術の進歩」という社会状況の中で生まれてきたと指摘しているが、事情はわが国でも変わらない。つまり、自分の死をできるだけ彼方へ追いやり、そのことによつて現在の生がとどなく希薄になってきている。「高齢化」すなわち平均寿命の著しい伸長の下で、いかに生きるべきかという新たな難問が顕在化してきているのである。

この間読んだ死についての警句の中で、あらためて納得したものに、有名な業平の辞世「ついにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」はさておき、鈴木正三の「人々、身の上を弁え、我知り顔に見ゆれども、先づ死の近き事を知る人、希なり」、「生者必滅の理、口に知って心に知らず」、また『徒然草』の「死は前よりしも来たらず、かねて後に迫れり」(百五十五段)などがあつた。死を自覚した生き方とは、しかし古来かくも困難なものであるろう。

#### 四、死への準備教育の方法

死への準備教育は基本的に「生涯教育」であつて、「子供に対して」、「中・高校生に対して」、「大学生に対して」、「中期の危機に際して」、「第三の人生(老年)に臨んで」に分類されているが、目下のわれわれの関心は大学生に対するものである。

「大学生のレベルでは、さまざまな哲学的人間解釈の研究を通じて死の問題と取り組むことが望ましい。古来、あまたの哲学者が人間と死との本質的な関係性を考究してきた。人生に意義(生きがい)を見いだすか否かも私達が死に対してとる態度と密接に関連している」<sup>10)</sup>

しかしながら、死への準備教育は「単なる知識の伝達」であつてはならない。学生が死に目を向け、死について自ら進んで思考するようしむけることが大切である。死の自覚の難しさを念頭においた上でのことであろう、デーケン<sup>11)</sup>は講義の中で二つの小論文を書かせている。ひとつは「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」で、あらかじめ、自分がガンなどの不治の病におかされ、医師からあと半年の命と告げられた場合を想定するよう説明しておく。

もうひとつは「別れの手紙」である。自分が不治の病で間もなく死

ななければならぬという状況を想定して、残される人に別れを告げる手紙を書かせるのである。いずれも無記名。宛先は両親、兄弟、友人など誰でもよいが、自分の親しい人と言わば最後のあいさつとして何を語るべきかについて、じっくり考えさせる。

これらの論文のねらいは、学生に対して生と死の問題を集中して考えさせようとする試みである。「幸い学生の多くは死にまつわる問題を深く考究するにつれ、自然に人生の根本問題への関心が生まれてきている」とデーケンは言っている。死を論ずることにより、学生は自身の価値観を自覚することになり、自身の価値観を批判的に検討し、よりよき生を目指すようになる。

#### 五、死への準備教育の課程内容

すでに見たように、死への準備教育には十五もの目標があり、テーマは多岐にわたる。担当する教員の専門分野や興味・関心によつても取り上げられるテーマは変わるであろう。デーケンは自ら上智大学等で実際に行なっている講義のテーマを列挙している。

- ① 死の意義、② 死へのプロセスの六段階、③ 告知—末期癌患者の知る権利、④ 死への恐怖とその理解、⑤ 死にゆく患者への援助とケア、⑥ 愛と死、⑦ 死とユーモア、⑧ 美術における死、⑨ 音楽と死、⑩ 文学における死、⑪ 安楽死、⑫ 自殺とその防止、⑬ 死の判定と臓器移植、⑭ 悲嘆のプロセスにおける人格成長、⑮ 世界各国における葬儀の風習、⑯ ホスピス、⑰ 宗教における死の解釈、⑱ 死後の生命。

十五の目標と重複する部分も多く、これ以上の説明は行なわない。

#### 六、死への準備教育の問題点

今後、「死への準備教育」を実際に行なうにあたっては、筆者自身いくつか不安がある。以下ではその不安をできるだけ整理してみるこ

とにしよう。

先ほど引用した箇所にも、「人生に意義(生きがい)を見いだすか否かも私達が死に対してとる態度と密接に関連している。」とあるように、死への準備教育を行なうにあたって、死をどう捉えるかは重要なことである。それが明確になれば、死への対応も自ずと決まってくると言つてよからう。

フランスのモラリスト、ロシュフコーは『箴言集』の中で「太陽も死もじつと見つめることはできない。」と書いた。あまりにも有名な話である。死は今なお筆者には幼い時に覗いたあの暗く、底知れぬ井戸を思い起させる恐ろしさがある。

しかし死を「じつと見つめる」とまではゆかなくとも、死を「見る」、あるいは「眺める」ということはしなければならぬ。筆者もそういう年齢に達していることは否定できない。「死への準備教育」に関心を持つ理由もそれであった。パスカルは「神を知らずに自分の悲惨を知ることは、絶望を生みだす。」と書いた。筆者もその通りだと思ふ。「人は死ねばゴミになる。」とは伊藤栄樹の著書の題名であり、また氏自身の偽らざる覚悟でもあったろうが、筆者ごとき常人の真似できるものではない。

神の存在を教えることなしに、死への準備教育を行なうことは可能だろうか。言葉を換えれば、信仰を持たずに死について講義することは可能なのか。倫理的に(「倫理的に」では軽すぎるようにも思うが、適当な言葉が浮かばない)許されるのかどうかという不安である。

死への準備教育の意義を積極的に評価するデーケン、日野原重明は共にキリスト者であり、来世を信じる人達である。その著作はいずれも慰め多いものであり、まことに有り難いものである。請い願わくは彼らの信じることくあつてほしいと思ふものの、他方では、『死を見つめる心』を著した岸本英夫に畏敬の念を禁じえないのである。東大

教授で宗教学者の岸本が自身ガンと戦いながら十年にもわたって書き続けたこの著作は、宗教に関する知識ならおそらく世界的な学者であつた氏が、自らは「死後の世界」をどうしても信じる事ができないといつて、「素手で」巨大な死に立ち向かう壮絶な戦いの記録である。

死への準備教育を行なおうとする私自身、死の恐怖と共に信仰らしきものもある。今の筆者には死はいくつもの顔を持つ。パスカルは「自分の悲惨を知らずに神を知ることが、高慢を生みだす。／神を知らずに自分の悲惨を知ることが、絶望を生みだす。」と言う。それに続く彼の結論は「イエス・キリストを知ることが中間をとらせる。なぜなら、かれにおいてわれわれは神とわれわれの悲惨とを見いだすからである。」ということになるのだが、自身の問題としてはなお先のことに思える。

死は様々な貌を見せる。モンテーニュにとってすら死の相貌は年齢と共に大きく変化している。人に特定の死の解釈を押しつけることはできない。学生に対しても無論そうである。われわれの役割は、デーケンも目標の一つに考えている「かけがえのない」「自分自身の死」を死ぬための、言い換えれば人間として生を享けた限り、不可避の運命である死をば、自らのように解釈し、どのように生きるべきかを考えるための基礎的知識の提供ということに止まるであらうが、今の筆者にはそれ以上のはできそうにもない。

### 【主要参考文献】

A・デーケン、メジカルフレンド社編集部編、『へ叢書』死への準備教育 Death Education (メジカルフレンド社、一九八六年)

第一巻『死を教える』

第二巻『死を看取る』

第三巻『死を考える』

- 曾野綾子、A・デーケン編、『生と死を考える』上智大公開セミナー第一集（春秋社、一九八四年）
- 平山正美、A・デーケン編、『身近な死の経験に学ぶ』同第二集（春秋社、一九八六年）
- 重兼芳子、A・デーケン編、『伴侶に先立たれた時』同第三集（春秋社、一九八八年）
- 曾野綾子、A・デーケン編、『旅立ちの朝に—愛と死を語る往復書簡』（新潮文庫、一九九〇年）
- A・デーケン著、『死への準備教育』、『医療と宗教を考える叢書 いのちの終末 死の準備と希望』（同朋舎、一九九〇年）所収
- A・デーケン著、『日本におけるデス・エデュケーションはどうあるべきか』、『仏教』別冊四「脳死・尊厳死」（法蔵館、一九九〇年）所収
- A・デーケン著、『悲嘆教育Grief Education』、『死生学』第三集（技術出版、一九九〇年）所収
- A・デーケン著、『キリスト教の立場から』、『新しい生命倫理を求めて』（北樹出版、一九八九年）所収

注

- 拙論は平成三年四月三日、第一回奈良大学教養部教育研究会（於、教養部共同研究室）で、「デス・エデュケーションについて」と題して行なった口頭発表を改題、加筆修正したものである。司会をしていただいた高山先生、貴重な御意見をいただいた先生方に深く感謝いたします。
- (1) 昭和六三年六月四日。この発表の内容は『比較思想研究』第十五号（比較思想学会、一九八九年）に掲載、また前掲『新しい生命倫理を求めて』に転載されている。
- (2) 『死を教える』、五二頁
- (3) 『身近な死の経験に学ぶ』、六七頁

- (4) 『死を教える』、二頁
- (5) 『身近な死の経験に学ぶ』、六八頁
- (6) 『死を教える』、二頁
- (7) 『身近な死の経験に学ぶ』、二頁
- (8) 『死について考える』（光文社、一九八七年）、九頁。また、『生き上手死に上手』（海竜社、一九九一年）、三九頁
- (9) 『旅立ちの朝に』、二五九頁〜二六〇頁
- (10) 『死を教える』、三八頁
- (11) 『死を教える』、三九頁
- (12) 現代日本のエッセイ『一草一花』（毎日新聞社、一九七三年）、八三頁
- (13) 岩波文庫『人生の短さについて』（一九八〇年）、九頁〜一〇頁
- (14) 岩波文庫『平凡』（一九七二年）、五頁
- (15) 於、東京・サンケイホール、『カセットで聞く学芸諸家〈第2集〉』（岩波書店/NHKサービセンター、一九八八年）
- (16) 田中美知太郎氏訳、新潮文庫『ソークラテースの弁明・クリトーン・パイドーン』、八四頁
- (17) 『日本名言名句の辞典』（小学館、一九八八年）。中公新書『辞世のこゝろ』（一九八六年）。『心にしみる最後の言葉』（日本文芸社、一九八六年）。
- (18) 『身近な死の経験に学ぶ』、七七頁
- (19) 二宮フサ氏訳、岩波文庫『ラ・ロッシュフコー箴言集』（一九八九年）、一八頁
- (20) 由木康氏訳、『パンセ』、L一九二、B五二七
- (21) （新潮社、一九八八年）、副題は『私のがんとのかい』。著者は元検事総長。
- (22) 前掲断章



L'éducation de la mort  
—surtout pour des étudiants à l'université—

Isao OMACHI

Sommaire

Dans cet essai j'ai traité de ce qu'est l'éducation de la mort (c'est-à-dire, enseigner à la personne à préparer sa propre mort) en consultant Alfons DEEKEN, prêtre, professeur à l'université de Sophia.

Il considère cette éducation sous quatre points de vue: 1.quatre niveaux; 2.quinze buts; 3.méthode; 4.contenu du cours.

J'ai résumé ses conceptions et puis j'ai traité surtout d'un des buts, qui sera le plus important pour des étudiants à l'université; inviter la personne à découvrir la valeur élevée du temps, à stimuler sa puissance créatrice et à réviser son jugement de valeur en citant Platon, Sénèque et quelques écrivains japonais.

En dernier lieu, j'ai énuméré les problèmes auxquels je me heurterai quand je ferai mes cours sur ce sujet aux étudiants japonais d'aujourd'hui.

